

平成 22 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18520249  
 研究課題名 アメリカ黒人文学と音楽文化におけるイスラム教の影響：破壊的欲望と創造のメカニズム  
 研究課題名 The Impact of Islam upon African American Literature and Music Culture  
 研究代表者  
 ウェルズ 恵子（WELLS KEIKO）  
 立命館大学・文学部・教授  
 研究者番号：30206627

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、アメリカ黒人文学と音楽文化におけるイスラム教の影響を検討する目的であったが、イスラム教よりも黒人の民間宗教的世界観や口頭文化の伝統に根ざしつつ、アメリカ社会からの圧力に応じたり抵抗したりする形で変容を繰り返してきているということが明らかになった。そこで主に、人種差別撤廃運動とイスラム教のヒップホップ世代との関連、奴隷時代からの黒人音楽文化の特色とラップ文化の特色、黒人口頭文化の諸様式、の3点を追求することとなった。細部について詳細の研究が課題として残った。

## 研究成果の概要（英文）：

The influence of Malcolm X and of the faith of Islam has had an impact on the street culture such as rap. On the other hand, the influence of African American long sustaining folk religion and oral tradition is even greater. Thus, this study clarifies the following three points: (1) The legacy of the Civil Rights movement and Black Power movement observed in the culture of the Hip Hop generation, (2) The continuity of African American oral tradition and Music culture from slavery times to the present, (3) African American oral tradition formulas. The close examinations of these topics are left for the next term of study period.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

## 研究分野：アメリカ文化

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：アフリカンアメリカン文化、口頭文化、黒人詩、アフリカ系アメリカ人フォークロア、音楽文化、African American culture, Oral Tradition, Folklore, Music Culture

## 1. 研究開始当初の背景

2001年の同時多発テロ以来、アメリカ国

内をはじめ非イスラム圏でのイスラム文化に対する根拠のない不信と警戒感が高まる

一方、アメリカ合衆国での黒人イスラム教徒の存在を知的に把握すべきであるという考えがあった。過去のアフリカンアメリカンたちの中で、イスラム教に改宗したマルコムXはとくに重要性であり、公民権運動期およびその後の黒人活動家や黒人の芸術活動においてイスラム教の影響は大きかったと推測された。そこで、本研究ではアフリカンアメリカンの言語文化活動のうち、とくに裾野が広く伝統も厚い口頭文化に焦点を当て、イスラム教の影響はいかなるものかを明らかにしようと試みた。

## 2. 研究の目的

アフリカンアメリカンの文化は、自分の身体以外に何も持たなかった奴隷時代の文化に伝統を置くために、手足の動作（身振り、踊り、リズム）に関連するものと口頭文化において傑出している。なかでも口頭文化は人々の思想や感情をよみとる興味深い研究素材である。

アフリカンアメリカンの創造的言語活動における特色として、破壊的（ないしは暴力的）衝動が創作力の源泉になっている場合が少なからずある。その衝動はかならずしも外部に向かうものではなく、自分の抹消を希求する場合もあれば極度な無力感や諦念ないしは無関心に向かう場合もある。こうした衝動は、奴隷主たちの利益とも合致する形で、神の国での永遠の命を保証するキリスト教に救いあげられてきた。そうした環境のなかで、マルコムXが主張したのは関心をいまある生に向けることであり、白人主流の社会（有色人種に対する差別社会）の利益に合致した宗教からの離脱とアフリカ人の宗教であるイスラム教への改宗であった。この姿勢がアメリカ社会に与えた衝撃は大きかった。

したがって本研究の目的は、アフリカンアメリカンが創造的エネルギーの源泉（クリエイティブドライブ）としてきた破壊的衝動とイスラム教との関係を明らかにしようとするのであった。

一方、研究の過程において、アフリカンアメリカンの創造活動においてはイスラム教の影響よりも民間宗教的世界観や彼らの口頭文化の伝統が重要だということが明らかになったので、「破壊的欲望と創造のメカニズム」の研究に関して研究目的からイスラム教の影響という縛りをなくし、イスラム教の影響も視野に入れつつ広く口頭文化の伝統との関連で追及することとした。

## 3. 研究の方法

研究はまず、奴隷時代の歌を検討することから始めた。それによってクリエイティブドライブとなっている破壊的衝動の性質を明らかにした。また、アフリカンアメリカンの

創造的活動とキリスト教との関連を指摘することができた（とくに、イエスの理解と母親の象徴的意味において）。

その後、1) Great Migration と黒人イスラム教発展の関連、2) アミリ・バラカを入り口に、ブラック・ムスリムと文化活動（文学、音楽を中心に）、3) イスラム教会の音楽文化、について調査を進めた。ところが、後世への影響力や文化的継承および文化変容のインパクトにおいて価値が高いと判断されるものの多くが、イスラム教よりはむしろ圧倒的にアフリカンアメリカンの民間宗教的世界観や彼らの口承伝統に深く根ざしていることがわかってきた。

そこで研究期間の後半では、1) アフリカンアメリカンの民間宗教的世界観、2) 社会の在り方と関連しつつ変容する口頭文化の流れ、3) 1960年代の動きと現代の黒人口頭文化の関連、を把握する研究へと方向を転換した。具体的にはアフリカンアメリカンの口頭文化（民話、歌、説教、ジョーク、掛け合いなど）を素材とし、奴隷時代から80年代くらいまでを検討しようと試みた。

補足しておきたいことがある。それは、アフリカンアメリカンの文化は彼らを他者とするアメリカ社会からの圧力にどう対応、対抗するかを大きな課題として発展してきたものであるから、非黒人が彼らの文化にどう接したかをつねに考慮する必要がある、という点だ。この特質のために、私の研究はアフリカンアメリカンの文化がどのようなものを示すことに集中するのではなく、その受容ないしは拒絶を示す非黒人文化をも検討対象としている。

## 4. 研究成果

<人種差別撤廃運動、イスラム教、ヒップホップ世代>

1960年代から70年代にかけての人種差別撤廃運動は、アフリカンアメリカンの間では、ネイション・オブ・イスラムの発生からマルコムXの影響力の拡大を経て、ブラック・パンサー党の反体制的な政治的活動へとつながっていった。この運動の中で重要なのが、イスラム教の存在である。

一方この時期には、活動家たちが国家の厳しい弾圧を受け、活動は発展せず、黒人のイスラム組織はどれも崩壊または大幅に変化せざるを得なくなった。人種差別撤廃運動時代の影響は、文化的にみると、活動家らの子ども世代に現れている。彼らはヒップホップ世代（またはラップ世代）と呼ばれ、都会のゲットーで育ち路上での音楽活動で自己表現をしてきた。

親の世代が賛同した共産主義や社会主義には幻滅し、反動的に過激な金銭至上主義を標榜するが、その内容は、自らの極貧と家族

崩壊の体験に基づいているだけに複雑である。彼らの歌には、宗教、信条、性差別、人種意識、政治批判、犯罪など、現代社会が抱えるさまざまな問題が盛り込まれている。

イスラム教に対しても、微妙な距離のとり方をしている。彼らの文化により重要な影響があったのは、むしろ黒人民間宗教と口頭文化の伝統であったと思われる。

#### < 黒人音楽文化の特色 >

奴隷時代の歌は、次のような点において現代音楽と関連している。

現実への絶望が死後の世界への希望となり、その希望が創作の源となっている。この場合の「希望」は現実世界と強い結びつきがある「期待」とは異なり、根拠に乏しく漠然としている、「生命維持力」と言い換えてもよいようなものである。

「恐怖」はアフリカンアメリカンの行動原理に密接している。

率直に言語表現するのを禁止・抑圧されている状況で、なお表現したいとの気持ちが独特の迂回表現を生み、それがフォーミュラ化してアフリカンアメリカンの言語活動の特色として発展してきた。

アフリカンアメリカンの音楽文化は、白人の民謡蒐集家によってその存在価値を認められ、白人の音楽市場に受け入れられるかどうかで普及や変容の度合いに大きな差があった。突き詰めれば、白人系音楽プロモータの扱いによって消滅あるいは発展、ないし変遷してきたとさえいえる。

の過程で黒人音楽は、白人への適合性と時代の流れに影響されつつ、宗教音楽と俗音楽とに分離してきた。

黒人による音楽文化プロモーションは、30年代以降に宗教音楽とレイスレコードの販売によって加速した。

ラップ文化について留意すべき点は次のようなことである。

ヒップホップの歌詞に表象される母親が、奴隷歌の母親像（絶対的な保護者）に深く関連している。

ヒップホップの歌詞に表象される恋人が、ブルーズの歌詞の恋人像（誘惑的な悪であり拒否者）に深く関連している。

闘争の表象に、60年代から広い支持を得てきているブラックイスラムの影響がみられる。

ヒップホップ世代の歌い手・作者たちは、ブラックイスラム運動の第二世代（子供たちの世代であり、その運動のインパクトと失敗とを感覚的に受け継いでいる。

#### < 黒人口頭文化の諸様式 >

アフリカンアメリカンの口頭文化にはい

くつか重要なジャンルがある。

黒人霊歌　フォーククライ、フィールドハラ、シャウト　ワークソング（仕事歌）　教会説教　民話　スレイヴナラティブ　ブルーズ　ゴスペルソング　トースツ　ダーズンズ　ラップ　都市民話　政治演説

これらについての詳細な研究は、今次の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

ウエルズ恵子、黒人霊歌の現代　ゴスペルソングの始まり、立命館言語文化研究、査読有、Vol. 18 No.2、2006、pp. 173-185.

ウエルズ恵子、恐怖の鎖を解くために　ジョンソンとオダム黒人霊歌集、文学（岩波）査読有、Vol. 8 No.1、pp. 236-249.

ウエルズ恵子、喪失の痛みを抱いて、ブルーズへ　ブラインド・ウィリー・ジョンソンとロバート・ジョンソン、立命館言語文化研究、査読有、Vol.19 No. 2、2007、pp. 191-211.

ウエルズ恵子、幻のブラック・クレオールソング・プロジェクト：ハーン、クレイビル、ケイブル、文学（岩波）査読有、Vol. 10 No.4、pp. 76-87.

〔学会発表〕（計4件）

ウエルズ恵子、黒人宗教民謡の口承テクストに対する二つのアプローチ、ユタ州立大学英文科連続講演会、2008年9月3日、ユタ州立大学

ウエルズ恵子、"Hope over Fear": バラク・オバマの『自伝』を読む"Hope over Fear": バラク・オバマの『自伝』を読む、日本アメリカ文学会関西支部大会、2009年12月5日、奈良女子大学

ウエルズ恵子、「語りえない人々の『語り』」に関する一考察、サントリー文化財団助成金研究成果中間報告会、2010年2月3日、サントリー文化財団

ウエルズ恵子、20世紀不況の時代における盲目の黒人辻説教師とブルーズシンガーたち：「声の詩」の特質を探る、「ノイズ--耳の文学」研究会、2010年2月27日、岩波書店

〔図書〕（計2件）

ウェルズ恵子、北米の小さな博物館（1項  
執筆）彩流社、2006年、212-219頁

ウェルズ恵子、黒人霊歌は生きている  
歌詞に読むアメリカ、岩波書店、2008年、  
全226頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

ウェルズ恵子 (WELLS KEIKO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30206627